おしん

(三)流浪篇

橋田

NHKテレビ・シナリオ

おしん

(三)流浪篇

橋田

日本放送出版協会

著者紹介

昭和4年京城で生まれる。日本女子大学国文科を経て，早稲田大学文学部芸術科卒業。昭和25年松竹脚本部入社，35年退社。以後シナリオ・ライターとして，NHKをはじめ民放各社においてもすぐれたテレビドラマの脚本を執筆，あわせて劇作家としても，数多くの舞台台本を手がけている。その幅広い活躍で，53年度放送文化賞を受賞した。

代表作として，大河ドラマ「おんな太閤記」，銀河テレビ小説「となりシリーズ」，ドラマ人間模様「夫婦」などがある。朝の連続テレビ小説は「あしたこそ」以来二度目である。

NHKテレビ・シナリオ
おしん (三) 流浪篇

定価 一、四〇〇円
昭和五十八年十一月一日 第一刷発行

著者 橋田壽賀子
発行者 藤根井和夫
発行所 日本放送出版協会
東京都渋谷区宇田川町四一—一(〒150)
電話 〇三—四六四—七三一一
振替 東京一—四九七〇一

編集協力 内館牧子／岡本由紀子／天野隆子
印刷所 凸版印刷 製本所 石津製本

検印廃止
©1983 Sugako Hashida Printed in Japan
ISBN4-14-005112-4 C0393 ¥1400E
(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)

流浪篇

装画　風間　完
装幀　蟹江征治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

25・26（要約）……5
27……7
28……57
29……107
30……157
31……206
32……256
35……306
33・34（要約）……305
36（要約）……357
37……358
38……409

本篇に収載のシナリオは、昭和五十八年九月二十六日より十二月二十八日までの放送分から選んだものです（数字は週を、＊印は日替わりを表す）。

●スタッフ

音楽　坂田晃一
考証　小木新造
制作　岡本由紀子
デスク　山岸康則
演出　江口浩之
　小林平八郎
　竹本稔
　望月良雄
　吉村文孝
　一柳邦久
美術　田坂光善
　宮井市太郎
　増田哲
技術　設楽国雄
　白石健二
効果　水野春久
　林幸夫
　小林光
方言指導　大久保正信
　芝田陽子
　吉岡節子

●キャスト

おしん　田中裕子
田倉竜三　並木四朗
父・大五郎　北村和夫
母・お清　高森和子
福太郎　北村総一朗
恒子　観世葉子
亀次郎　成瀬正
母・ふじ　泉ピン子
長男・庄治　吉岡祐一
その嫁・とら　渡辺えり子
りき　渡辺富美子
加賀屋・くに　長岡輝子
清太郎　石田太郎
みの　小林千登勢
加代　東てる美
政男　森篤夫
長谷川たか　渡辺美佐子
テキヤ・健　ガッツ石松
神山ひさ　赤木春恵
よし　山田昌
さだ　伊藤友乃
田倉雄　冨家則政
その少年時代　松田洋治
田倉初子　長島裕子
その少女時代　上中はるか
八代圭　大橋吾郎
高倉浩太　渡瀬恒彦
田倉しん　乙羽信子
ナレーター　奈良岡朋子

26・25

今日限りで田倉家を出たいと両手をついて舅と姑におしんが挨拶したのは、佐賀に身を寄せてから一年余りたった晩秋であった。竜三にその気がないのなら、雄と二人ででも東京に出るというおしんに姑は激怒した。嫁の立場をなんと心得ているのかと身体を震わせる姑に、おしんは一歩も引かなかった。「なんの希望もないまま一生を終わりたくない、別の生きかたがあるような気がする」とおしんは思いの丈をすべて訴えた。そんなおしんに決意の固さを知らされた姑は、切り札を出してきた。田倉家の孫である雄は絶対に渡せないというのである。子供と別れては、母親は死んだも同然である。だが、いくら懇願しても姑の返事は冷たかった。ひとりで家を出るか、親子三人でここに残るか二つにひとつ。おしんは目の前が真っ暗になる思いであった。

ところが、思いがけないことが起きた。嫂の恒子が姑の目をぬすみ、うまく雄を連れ出してやるという。恒子は思ったとおりに生きるおしんが羨ましく、応援したかったのである。と同時に、それは今まで耐えに耐えてきた恒子の姑に対するひとつの反抗でもあった。

首尾よく雄と二人東京に出てきたおしんをたかは温かく迎えてくれた。だが、おしんの手は怪我の後遺症がひどく、全く髪を結えなくなっていた。座敷女中をしている佐和も力になってくれたが、雄を抱えて出来る仕事などあろうはずもない。途方にくれるおしんに手をさしのべてくれたのはあのテキヤの健であった。健は〝どんどん焼き〟を売る露店を出せるように走り回ってくれたのである。

おしんは雄を傍のゴザに寝かせて、師走の寒空の下、一日中〝どんどん焼き〟を売った。慣れない仕事とはいえ、自分の腕で稼ぐしあわせ、雄といつもいられるしあわせはたとえようもない。そして、いつか必ず親子三人で暮らそうと言って送り出してくれた竜三の言葉も、おしんのささえになっていた。

だが、佐賀では姑が竜三を再婚させようと奔走していたのである。おしんの手紙は竜三に見せず、すべて姑が破り捨てていた。竜三は便りがないことでふてくされ、おしんはおしんで返事がないのはもう忘れられたのかと悩んでいた。そんな矢先、健の女がどなり込んできたのである。色じかけで健

を操っていると誤解し、逆上するミドリに「おれの片思いだ」と言う健。おしんは健に甘えすぎていた自分を反省すると同時に、健の気持を知ってしまった以上、軌道に乗り始めた露店ではあったが続けてはならないと思った。もはやおしんには、山形の実家に帰るしか道はなかった。

だが、庄治の代になっている実家はやはり居心地のいい場所ではなかった。なにかとおしんをかばうふじと、庄治夫婦の仲も日ごとに悪化していく。なぜ返事をくれないのかと、遠い竜三を恨みながら、おしんは農家の手伝いに出て細々と日当を稼ぐ暗い日々を送っていた。

そんなある日、加賀屋のくにが危篤だという報が入った。昏睡状態から一時さめたくには、駈けつけたおしんに加代のことを頼むと息をひきとった。最期まで曾孫が見たかったと言いながら——。加代の夫政男は女とも縁を切り、加賀屋の婿として生まれ変わっていたが、加代とは不仲であった。ひとつの時代の終焉を告げるようなくにの死とはいえ、加代のことだけがどれほど心残りであったかしれない。

初七日を終え、帰ろうとするおしんに加代が突然、加賀屋の空いている貸家でなにか店を出したらと言ってきた。おしんにとっては夢のような話であった。おしんは人生の大きな岐路を感じていた。

27

酒田・加賀屋——大正十四年五月下旬（昼）

N——酒田の米問屋、加賀屋の大奥さま、くにが亡くなった。七つから十六まで加賀屋に奉公したおしんを、孫娘の加代と同じようにいつくしみ、女としてのたしなみをしつけてくれた恩人であった。くにの葬儀を手伝い、せめて初七日までくにのそばにいたいと加賀屋で世話になることにしたおしんに、加代が思いがけない話を持ち出した。酒田で商売をしないかというのである。

同・居間

加代、清太郎、みのの前でかしこまっているおしん。

清太郎「（加代に）なにばかなこと言ってるんだあ、おしんは、すぐにも佐賀さ帰らねばならねえ身体だぞ。なんぼお前がおしんをそばにおきてえつていうたって、こげだどこさ引き止めるわけにはいかねえんだ」

みの「んだよ、佐賀には旦那も待ってる……、嫁としてのつとめもある……。お前の思うとおりにはいかねえもんだよ」

加代「おしんは、その気になってるんだ。あの家あのまま空けどいたってしかたねんだろう。他人に貸すんだったら、おしんになにか商売でもさせてやったほうが……」

清太郎「あげだ家が惜しぐて言ってるんではねえんだ。おしんはもう昔のおしんではねえ、田倉てう家の嫁になった女子だ、たとえおしんがそのつもりになったとしても、おしんひとりで決められることではねえ。お前の勝手になることでもねえんだ」

みの「（おしんに）おしん、ほんとに遠いところよぐ来てくれだの。旦那もお姑さんもよぐ出してくださったもんだ……。なかなか出来ねえごとだぞ。ありがてえと思ったら、一日も早く帰らねえと、罰当だるぞ。土産もちゃんと支度してある。おしんに肩身の狭え思いさせねえようにの」

おしん「……」

みの「（加代に）お前のわがままで、おしんを困らせるよ

うなこと言うもんでねえ」
加代「おしんはな、佐賀の家なんかとっくにとび出してきてるんだよ」
おしん「(あわてて)お加代さまッ……」
加代「(おしんに)隠してるわけにはいかねえだろう。おしんがほんとに商売してえてうなら、なにもかも話さねえど……」
おしん「……」
みの「(おしんに)佐賀の家出てきたって……旦那さんも一緒にだか……?」
加代「竜三さんはおふくろさまのそばさへばりついてるんだよ」
みの「おしん……?!」
おしん「私が悪いんですッ……。お姑さんの辛抱が出来なくて……」
みの「逃げ出したんだか……?!」
加代「小さいときから、ひとの二倍も三倍もの苦労を辛抱してきたおしんが、そげなごとするなんて、よくよくのことだ。そのおしんをかばってもやれねえ亭主なんか、男の風上にもおけねえ。おしんが見切りつけるのも無理はねえんだよ」
みの「男はみんなおふくろさまには頭が上がらねえもんださげ……。私だって、どれほど泣かされてきたんだか……」
しょっぱい顔の清太郎。
みの「(おしんに)それだばつれえ思いしたんだなあ。んだば、今、どこさ……?」
おしん「この春から、実家さ帰っています」
清太郎「んだろのー、どうも佐賀から来たのではおかしいと思ってだんだ」
みの「山形だばおっ母さんもおられるし……心配はねえんだろうが……」
加代「それが、もう兄さん夫婦の代になってるもんで、いろいろあってえ。おしんはあっちこっち日銭稼ぎに手伝って歩いてるんだと……」
おしん「うちの田んぼや畠は、兄と母とで手が足りてるもんで、ぼんやりしてるわけにもいかないもんで……」
加代「おしんと雄坊が食べるものは、自分で稼がねえと、厄介者扱いされるんだと……」
みの「それはねえんだろう。実家のためにおしんがどれだけしてきたが、兄さんだって知らねえはずはねえだろうにの。うちに奉公してもらってだのも、おしんはそっくり実家さ渡してたんでねえが」
加代「今、兄さん夫婦が住んでる家だって、おしんが髪結

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

いして仕送りした銭で建ったんだ。そげだごとも忘れてッ……」
おしん「それはいいんです。私は、父のためにしたことですから……」
みの「みんな自分のことしか考えねえだからの。それだら、実家さいでも、おしんの立場はねえんでねえが」
加代「だから、おれも酒田で商売させる気にもなったんだ」
清太郎「んだなあ。それでおしんが救われるてうんだったら……」
おしん「……」
清太郎「ただ、ひと口に商売っていったって、そげ簡単なもんではねえんだぞ」
加代「ええでねえか。そりゃ、うちを手伝うてもらったってええ。んだども、それではただの奉公人だ。おれ、おしんには独り歩き出来るようにしてやりでえ。おばあちゃんはなんにも知らねえで死んだども、もし、おしんのことがわかっていたら、おばあちゃんだって、おれとおんなじようなことしてやったど思う……。おばあちゃんは、いつもおしんに言ってた、女子だって自分の足で歩けるようにならねばならねえぞって……」
おしん「……」
加代「そうしてやるのが、おしんを可愛がってたおばあちゃんへの供養だ……。(と、清太郎とみのに)そうだろ」
清太郎「(笑って)加代の思うとおりにしてやったらええ。おしんが加代にしてやってくれたごと考えだら、商売の資本出すぐれえ安いもんだ」
加代「おしんッ、よかったのッ」
おしん、黙って頭を下げる。
清太郎「なにがよかったんだ……。たとえ、おれたちが反対したって、やると決めたことはやり通すつもりでねえか。(と、笑う)」
みの「しかたねえんだろ……。加賀屋はもう加代の身代だもの。(と、苦笑し)それで、どげな商いするつもりだな?」
加代「それが、頭痛のタネなの」
清太郎「これだば、いつのごとになるがわからねえもんだの」
顔を見合わせて明るく笑う清太郎、みの、加代。
が、おしんは真剣な表情。

同・空き家(午後)

荒れた土間で、ぼんやり考えこんでいるおしん

――雄がひとりで遊んでいる。
と、加代がのぞく。
加代「やっぱりここだったが……」
おしん「(我に返り)すみません、すぐ帰るつもりだったもんで、黙って出てきてしまって……。そろそろ夕飯の支度手伝わないと……」
加代「そげなごとはええ。台所にはちゃんと女子衆がいる。うちにいる間は雄坊とゆっくりしてろ。今まで休む暇もなく働いてきたんでねえか。たまには、ぼんやりするときもねえと、身体保たねえんだぞ。(と、笑い)店始めたら、また走り続けねばなんねえだからな」
おしん「でも、ほんとに私に出来るんだろか……」
加代「(笑って)おしんらしくねえぞ。髪結いしてるときだって、ひとりでカフェの女給たちの出髪してきたおしんでねえか。竜三さんと一緒になってからは、つぶれそうな羅紗屋を、在庫の布地露店で叩き売りして、その銭を資本に、子供の既製服作って、田倉商会を立派に立て直したのもおしんの力だっただぞ、おれおしんの根性と才覚を見込んで勧めてるんだ」
おしん「……」
加代「一か八かやってみれッ。失敗するのこわがってたら、なんにも出来ねえもんだぞ」
おしん「んでも、もし、加賀屋さんに迷惑かけるようなことになったら……」
加代「なにをするにしたって、こげなどこでやる商売の資本なんて知れてるんだ。たとえ返ってこなくとも、それでつぶれるような加賀屋ではねえんだよ」
おしん「……」
加代「(おしんの顔をまじまじと見て)なんか考えてることがあるんだな」
おしん「(ためらって)……」
加代「おしん」
おしん「飯屋はどうかと思って……」
加代「……」
おしん「酒田の港は、庄内の米を運び出したり、方々からものを運んできたりする船が出入りするから、船員や船の仕事するひとたちが多いってきいてましたけど、確かに町歩いてみると、今でもそういう衆にたくさん出会います。そんなひとたち相手の飯屋を出してみたいと……」
加代「……」
おしん「どうせ私が作る料理だから、大したものは出来ません。んだども、みんなが家で食べてるお惣菜くらいのものなら……」

加代「そげなものが、商売になるんだか……」
おしん「料理屋では無理だども、船に乗ってる衆相手なら……。長いこと船の暮らし続いてたら、なかなか家でこしらえるような惣菜は食べられないんじゃないだろうがって……。だから、みんなに懐かしがられるようなものを……」
加代「あんまり儲かりそうにもねえんだな。惣菜なら安いもんだろうし……よっぽど繁盛でもしねえと……」
おしん「実家では、一日手伝いにいって、腰が立たなくなるほど働いたって、三十銭か五十銭にしかならない。それでも、雄と私の食い扶持にはなるんだもの……。そのこと思ったら、大して儲けはなくたって、やっていけるんだから……」
加代「んだの。船の衆なら、掛け売りはねえ、日銭が入る商売は悪くねえかもしれねえが……」
おしん「それに、仕入れるものも安くてすむし、品物を店に並べて寝かしておくてう商売ではないんだから。資本もたくさんはかからない。ただここをこざっぱりするように手を入れねばならないし、食卓とか器とかにも銭かかるけど……」
加代「器くれえなら、うちで蔵に眠ってるガラクタがいっぱいあるがら、それを使ったらええ、どうせ安い料理作るんだ、なにも上等なもの揃えることはねえんだろう」
おしん「お加代さま……?」
加代「その代わり、忙しいぞ。ただ店番してものを売るだけではねえ。自分で料理して、客に出して、汚れた器も洗って……それをみんなおしんひとりでやってたらおおごとだぞ」
おしん「身体使うことならなんでもないです。自分の身体使ってすむんなら、どんなことでも……」
加代「……」
おしん「忙しいほど客が来てくれるかどうかわからないけど。(と、苦笑する)」
加代「おしんにその覚悟があるなら、やってみたらええ」
おしん「お加代さま……」
加代「明日からでも、大工に来てもろうて……奥で寝られるようにもして……」
おしん「夢みてえな話です……」
加代「んだども、その前に、一度実家さ帰って、おっ母さんともよぐ話し合ってくるんだな。おしんひとりで決めてしまっては……」
おしん「母なら、わかってくれます」
加代「そうはいかねえだろ。おっ母さんにはおっ母さんの

考えだっておありだろうし……」
おしん「帰ったら……出てこられないような気がするんです」
加代「……？」
おしん「母だって、ほんとは雄や私と暮らしたいんです。母の顔を見たら、とても母をおいて出てくるなんて……すぐ帰るつもりだから、出てもこられたんです」
加代「おしん……」
おしん「母には申しわけないけど、心を鬼にして、このまま……。たとえ、母が気持よく許してくれたって、母がつらいのを知ってて、出てくるなんて、とても私には……つらいんです！　会うのが……」
加代「……」
おしん「いつか、きっと母を酒田へ呼んで一緒に暮らせるように……そうなれるように一生懸命お店やります」
言葉もなくそんなおしんを見つめる加代――つらそうなおしん。

山形・おしんの実家・庭（夕）

ふじと庄治が野良から帰ってくる――ふじ、大急ぎで古い家のほうをのぞいてみる。
が、がっかりする。

庄治「（手足を洗いながらふじに）まだ帰ってこねえのが、おしんは……？」
ふじ「……」
庄治「初七日すむまで加賀屋さいるってごどだげんと、とっくに終わったはずだべ。のんきなもんだ、こっちのごど忘れてしまってよ」
ふじ「お前に迷惑かげでるわけであるめえし。お前に文句言われるごどねえべ」
庄治「おれ、母ちゃんが淋しいんじゃねえがと思ってよ。ひとりで待ってるのに、母ちゃんの気持も知しゃねえで……」
ふじ「お加代さまどは姉妹みだいにしていだだいてるんだし、さんざお世話にもなったんだ。いろいろ用もあれば、知らん顔して帰ってくるわけにもいがねえべ、んでも、いづまでも厄介になってるごども出来ねえ。そろそろ帰ってくるべよ」
庄治「ひとりの間は、おれだぢと一緒に飯食え。母ちゃんひとりだら、なにも別に飯作るごどもねえでねえが。ひとりで食ったってうまぐねえべよ」
母親を気遣う庄治の優しさに、思わず庄治を見つめるふじ。
そこへ、とらが出てくると、

とら「おっ姑さんに、(と、封書をさし出し)おしんさんからだ」
ふじ「すまねえな」
と、あわてて懐にねじこむふじ――顔を見合わせる庄治ととら。

同・古い家
りきが来て、おしんの手紙を読んでいる――じっときいているふじ。
りき「こちらにいても、大してお役にも立ちませんでしたが、無事に大奥さまの初七日もすみ、すぐにも帰るつもりでおりましたところ、お加代さまが酒田で商売をやらないかという、ヤブから棒のお話で……」
ふじ「……?!」
りき、声を出して読むのをやめ、あわてて便箋の先のほうに目を光らせる。
ふじ「それで……商売するって書いであるのが……?! 酒田にいるつもりだべがッ」
りき、じっと読んでいる――、不安そうにそのりきを見つめるふじ。
ふじ「一体、酒田でなにあったんだべ」
りき「おふじさん……、(と、つらそうに)おしんちゃんは、当分帰ってはこねえようだなあ」
ふじ「……?」
りき「加賀屋さんの持ち家が空いでで、そこで飯屋するごどになったんだど……」
ふじ「……」
りき「お加代さまが、おしんちゃんの事情ば察して、心配してくださったんだど……。自分で店ばやったら、もう誰さも迷惑かげねえで食っていげるって……」
ふじ「んだら、雄もごさは、もう……?」
りき「雄坊のごども考えで、そうするごどにしたんだど……。自分の店なら、雄坊ば手もとにおいで働げるしなあ」
ふじ「……」
りき「母ちゃんには申しわけねえげんと、母ちゃんのためにもそうしたほうがええと思ったがらだそうだ」
ふじ「おしんは、おれがおしんばかばって、庄治夫婦どの仲悪ぐなったって、えらぐ気にしてたがら……。自分さえいながったら、おれが庄治夫婦どうまぐいぐと思ったんでねえべが……」
りき「んだな、こごさいだら、おしんちゃんは、やっぱり出戻った余計者だがらな。なんぼおふじさんが守ってやるべど思ったって、肩身の狭い思いは変わらねえ。

いいや、おふじさんがおしんちゃんば、かばおうとすればするほど、おしんちゃんはなおのごどつらがったんでねえが」
ふじ「んだら、おれに苦労かげるまいどして……。おれはほだなごどなんでもねえのに……」
りき「んでも、おしんちゃんにしてみだら……。母ちゃん思いだがらな、おしんちゃん……」
ふじ「……」
りき「それにしても、店出す前に一度くらい帰ってきたって……。なあ……」
ふじ「んだら、このまま酒田さ……?」
りき「母ちゃんの顔見だら、未練が残るがらって……」
ふじ「おしんらしいな（と、淋しそうに笑い）帰ってきたってまだ酒田さ行ってしまうんならおれだって会わねえほうがええ……。わざわざつらい別れするために帰ってくるなて、たくさんだ！」
りき「おふじさん……」
ふじ「このままでええ、酒田なら、いつだってまだ会える……会えるどぎもあるべよ……」
りき「店がうまぐいったら、母ちゃん迎えにくるって……。一緒に暮らす日い、くるの楽しみに一生懸命働ぐって書いである」
ふじ「おれ、子供の世話になどなるつもりはねえ。ただ……おしんがそう思って頑張ってくれだら……」
りき「……」
ふじ「おりきさんが、今度、酒田さ行ぐごどがあったら、おしんにそう言ってけろ」
りき「……ああ」
ふじ「おしんも、竜三さんば当でにしねえで、雄ど生ぎでゆぐ覚悟出来だんだな。ふしあわせな娘だげんと、加賀屋さんのおがげで……。ありがでえと思わねど……おれのどごさいだって、なにもしてやれねえんだがら……。（と、自分に言いきかせるように言う）」
つらそうなりき。
と、庄治の声。
庄治の声「母ちゃん、飯だぞッ。一緒に食うべッ」
ふじ「（表へ）ああッ、すまねえな、すぐ行ぐがら……」
りき「おふじさん……?」
ふじ「庄治だって鬼ではねえ。まだ前の暮らしさ戻ればええんだがら……」
淋しそうに笑っているふじ。

酒田・空き家（昼）

大工が手を入れ始めている——見にきているおし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com